

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.146

1997.5.25

＝巻頭言＝

絶滅論

—地球環境問題とは何か—

■第23回国際学生セミナー

転換期の世界

—アジアにおける日米関係—

■第171回大学共同セミナー

絶滅論

■第13回大学教員研修プログラム

カリキュラムを活かす

■FD通信⑤

大学教育のアカウントビリティとカリキュラム

■業務通信



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

絶滅論——地球環境問題とは何か——

東京大学大学院理学系研究科助教授 松井孝典

現在、私たちの目前には環境問題、資源・エネルギー問題、人口問題、食糧問題などの難問が山積されています。これらの問題を、どのように考えたらよいのでしょうか。今回のセミナーでは具体的な解決策を求める前に、これらの問題へのアプローチのあり方をめぐって「絶滅」という現象を手がかりに考えてみたいと思います。

●なぜシステム論なのか

今、自然科学では要素還元主義的な考え方で本当に自然が見えているのかが問われています。要素還元主義とは、対象をこれ以上分かち難い要素に分解し、その要素とは何かを理解し、それを足し合わせれば全体が見えるという考え方です。しかし、要素間の関係は単なる足し算で表される線形的なものだけでなく、かけ算で表される非線形的で非常に複雑なものもあります。現代は、あらためて全体と全体を構成するものとしての個との関係が問われている時代です。

では、いったいどんな枠組みで対象を捉えたらより自然が見えるのでしょうか。ここでは、システム論的な見方で考えていきます。システムとは、全体を構成する要素からなっていて、要素間の関係によって全体の状態が決まるものことです。この要素間の関係をどこまで考えるかによってシステムは無限に複雑化していきます。最近、「複雑系」という言葉をよく耳にしますが、あらゆる要素間の関係をきちんと考えていくと、大変複雑なものになっていきます。私たちが見ている自然や社会も明らかに複雑系です。

②

●絶滅とは何か

システム論的に生物を見ると、いろいろな生物種が互いに住みわけて、ある個体数を維持して存在している状態があります。この秩序が、あるときに崩壊して混沌とした状態になり、個体数が急速に減少するのが「絶滅」という現象です。文明で言えば、人間の個体数が急速に減少することが、文明の崩壊という現象と考えられます。

システムの状態は、①混沌とした状態②秩序だった状態③秩序だった状態が時間的に変化している状態④全体の位相が揃っている状態、と四つに大別できます。この中で、生物の状態が一番近い③の状態と絶滅という現象を関連づけてモデル化することは可能です。モデルとして考えやすいのは、数学的な意味で振動することをイメージし、この振動の周波数を個体数に置き換えます。秩序だった状態が変化している時に、ある種のグループが突然消滅する。その時に、どういう条件であるかを数学的に特定します。しかし、これはあくまでもモデルであり、実際とは合わないことが多くあります。どこが合って、どこが合わないかが重要です。それが全部合ってくると、はじめて絶滅論という理論体系が整理されます。

●隕石衝突と地球環境の変化

私の研究対象は生物・人類・文明が存在し、絶滅する舞台である地球です。私と絶滅論との関わりは、巨大隕石が六五〇〇万年前に地球にぶつかり、その結果恐竜が絶滅したという隕石衝突説に関わるユカタン半島のク

レーター調査にあります。一九八〇年、世界中のKT境界層と呼ばれる六五〇〇万年前の地層に、イリジウムという元素が異常に集中していることがわかりました。イリジウムは、普通は地殻の中には少ない物質です。これを発見した人が分析した結果、その原因は隕石が衝突したからではないかと結論しましたが、衝突の証拠になる巨大クレーターが見つからないために仮説にすぎませんでした。

しかし、ハイチのKT境界層でテクタイトという証拠物質が発見され、現在、地下の重力異常の分布からクレーターの場合が推測されています。直径10kmくらいの巨大隕石が降ってきたと推測されていますが、太陽系のスケールで過去30億年で最大級の衝突です。これだけの衝突があると、地球には直径100km、深さ20〜30kmの穴が瞬時にできますから、地殻がなくなり、全て蒸発してしまうことになります。たとえばこの付近の地下に含まれていた二酸化炭素の量を計算すると、今の大気中の3倍から10倍になります。これはまさに地球温暖化で、六五〇〇万年前に起こった地球環境問題です。恐竜の絶滅が、このような環境の変化によって引き起こされたものであることは十分に考えられます。

システムを特徴づける要素がどう変化しているかという観点から地球の歴史を見ると、非常におもしろいことに気づきます。今の地球システムは、内核・外核・下部マントル・上部マントル・海洋地殻・大陸地殻・海・大気・磁気圏・生物圏・人間圏という11個の要素から構成されていますが、初めから要素の数が11個あったわけではありません。人間圏という要素が成立したのは約1万年前のこと



まついたかふみ
1946年生まれ。専門は比較惑星学。著書に『地球・宇宙そして人間』『宇宙誌』『地球倫理』などがある。

です。

●人間圏の成立

生物としての人間の歴史は約五〇〇万年前にさかのぼり、猿から人間が分かれたのですが、その人間は狩猟・採集というライフスタイルをとっていました。これでは、他の生物と何ら変わりはありません。ところが人間は農耕・牧畜を始め、生物圏のなかの物質・エネルギーの流れを利用する生き方から抜けて、地球システムというもっと大きなモノ・エネルギーの流れに関与する生き方を始めました。たとえば森の木を切って畑にすると、大地の浸食の割合が変わったり、太陽から入ってくるエネルギーがどのくらい宇宙空間に反射されるかを表すアルベド（太陽光の反射率）の量が変わり、それまでの地球システムのモノやエネルギーの流れに影響を与えることとなります。

生物圏にしても、初めから要素の一つとして存在していたわけではありません。光合成生物が地球上に異常に増殖した時代がその始まりです。光合成生物は、大気中にある二酸化炭素と水を材料にし、太陽エネルギーを使って自らの体を作り、不要になった酸素を大気中や海中に放出します。光合成生物が異常に増えると、大気あるいは海中にある二酸化炭素が減って酸素が増えます。すると海中に含まれる鉄のイオンが酸化されて、水に溶けない状態になり、大量の鉄が海底に沈殿します。

また大陸地殻の場合も同様です。たとえば大陸がなければ、雨は海から蒸発した水が凝縮して海に降るだけなので、何事も起こりま

せんが、そこに大陸という出っ張ったものがあると、雨は大陸に降り、大陸を削り、海の中に大陸物質を流し込みます。このように、それまでの要素間に新しい関係が生まれるということとは、地球システムを構成する新たな要素が一つ加わったと解釈できます。

●何が環境問題か

このようにシステム論的に地球を見ると、現代は地球の歴史のなかでその時代を特定するようない時代です。それは地球システムに人間圏という要素がつけ加わり、それまでの地球システムのモノやエネルギーの流れに攪乱が生じ、その攪乱が私たちに覚えてきた時代です。これが、環境問題であり、食糧問題であり、人口問題であり、資源・エネルギー問題です。システムに新しい要素がつけ加わってきたというのが地球の歴史であり、新しい要素が加わるとシステムのモノやエネルギーの流れには必ず、攪乱が生じます。私たちは、それを「汚染」と呼んでいます。そうだとすると、地球の歴史は汚染の歴史であるとも言えます。たとえば、生物圏という要素が加わったときは酸素による汚染が生じました。その結果、酸素がない時代に繁栄していた生物は住処を制限されますから、この生物からみれば汚染ということになります。この汚染という現象を単に倫理的問題として考えてしまうのはおかしいのではないのでしょうか。人間圏の存続にとって何が問題なのかという観点から考え直さなければなりません。

●歴史に学ぶ知性

地球の歴史を踏まえて現代の問題を考える

ときに重要なことは、人類の未来がどうなっていくかを考えることです。しかし、実際は未来を予測することなどできません。私たちの知性とは、歴史に学ぶ知性であり、歴史がどうだったから未来はこうなるという議論しかできません。人文科学や社会科学では、人間の歴史の中に行動の普遍性や社会構造の普遍性を探り、自然科学はビッグバン以来の150億年の宇宙・地球・生命・人類の歴史を探求しています。

私たちはこれまでに宇宙・地球・生命が、時間的にどう変化してきたかは知ることができません。その変化の本質は、均質なものが異質なものに分かれてくること、つまり「分化」ではないでしょうか。宇宙の始まりは、非常に高温で、物質もエネルギーも区別がないほとんど均質な状態でした。それが冷えてくる過程で、重力・電磁力・核の力などが分かれてきて、その力に相当する構造や秩序が生まれてきました。地球の場合には、火の玉の地球からシステムを構成する要素として異なる物質圏に分かれてきました。生命の時間的发展現象は普通、「進化」と呼ばれます。しかしこれも、生物は分化していると言わなければならない。生物が機能・形態を複雑化する現象を進化と呼んではいますが、なぜ起こるかという点、生物の生存環境が変わるからです。これも環境の分化が原動力になっています。

このような宇宙・地球・生命の分化の歴史を踏まえた上で、地球の一番新しい構成要素である人間圏における分化とは何か、を考えることが私たち人類の未来を考えるヒントになるのではないのでしょうか。（文責・編集者）

転換期の世界

— アジアにおける日米関係 —

▼ 主題解題

筑波大学社会工学系教授 佐藤英夫氏

▼ セクション演習

A 歴史から読み解く日米関係の21世紀像
中央大学法学部教授 滝田賢治氏
神田外語大学外国語学部助教 高杉忠明氏

B 「イメージから見た」アジアにおける

る日米関係

桜美林大学国際学部教授 上坂 昇氏
時事通信社解説委員 金重 紘氏

C 台湾海峡クライシスと日米関係
日本大学国際関係学部教授 宇佐美 滋氏

D アメリカの政権交代の視点から見た日米関係
拓殖大学海外事情研究所 渋谷 司氏
聖心女子大学文学部教授 関場誓子氏

E U.S.-Japan Relations in the context of Regionalism
南山大学法学部教授 菊池 努氏
筑波大学社会工学系教授 佐藤英夫氏

国際大学国際関係学研究科講師 信田智人氏

【運営委員】

筑波大学社会工学系教授 佐藤英夫氏
中央大学法学部教授 滝田賢治氏
桜美林大学国際学部教授 上坂 昇氏
聖心女子大学文学部教授 関場誓子氏

【参加状況】 105名 (内女子44名)

①国籍別 (内外国人26人)
日本 (79)、中国 (7)、韓国 (4)、マレーシア (3)、アメリカ、オーストラリア、ドイツ (各2)、台湾、エジプト、オランダ、カナダ、スウェーデン、チリ (各1)

- ④
- ②大学別 (32校)
中央 (26)、慶応義塾 (12)、日本 (8)、筑波 (6)、桜美林・聖心女子 (各5)、青山学院・立教・早稲田 (各4)、上智 (3)、埼玉・長崎 (各2)、千葉・東京・東京工業・大妻女子・共立女子・杏林・国際基督教・駒沢・成蹊・専修・武蔵・法政・明治・明治学院・明星・国際・神戸学院・国学院・創価・同志社 (各1)、その他 (4)
- ◆
- 世界は今、急速に変化している。この数年間に起こったことは、40、50年前にはまったく予想できなかった。冷戦が終焉した後、パックス・アメリカーナの世界も新たな世界秩序を求めて変化しつつある。このような歴史的な流れを踏まえつつ、将来の世界を展望してみることが極めて意義のあることだ。とりわけアジアにおける日米関係は、今後の世界の動向を左右するほど重要な二国間関係だ。
- セミナーは12カ国から26名の外国人を含む総勢105名の参加者によって、終始活発な議論が繰り返され、プログラムの五つのグループに分かれて

の分科会やシンポジウムと総括討論などの全体会を組み合わせる形で展開された。また、今年度も「国際学生セミナー同窓会」基金から留学生の参加経費の一部に対する補助をいただいた。なお、このセミナーの詳細は、参加学生を中心に編集作業が進んでいる『第23回国際学生セミナー報告書』(5月刊行予定)をご覧ください。



アジアにおける日米関係はどうあるべきか。各セクションからの報告を踏まえてのまとめの討論——最終日の討論風景 (講堂にて)



講師陣——前列左より菊池・宇佐見・関場・岡 (館長)・佐藤・高杉・滝田・信田・渋谷の各氏。後列左より上坂・金重の両氏

自分の新しい一面を発見できた

——日米関係のダイナミックスを学んで

聖心女子大学文学部3年 橋本直子

Aセクションのテーマは、日米関係の歴史を再度概観することによって、21世紀のシリオを展望していくことだった。具体的には、開国から現在までを三つの時期に区切り、レベルにおいてはGlobal・Regional・Bilateral、要素については政治・経済・安全保障という観点から各期間の日米関係を考察した。本来は、今日までの歴史をパターン化し、両国関係の歴史的特徴を抽出する予定だったが、限られた時間の中で、また20人近い様々な視点を持つ学生の間で、パターンについて一定のコンセンサスを得ることは難し

Japan takes a big role in the contributions of the international economic development

慶応義塾大学大学院修士課程 Hegazy El-Gazar

We had three sessions of 2.5 hours in section E and the aim of each was to promote discussion among the students and teachers about contemporary the world in transition : U.S.-Japan relations in Asia-Pacific Region. This section done particular well, and it was a valuable chance for me to understand and exchange ideas and opinions with other peoples, Japanese students, foreigners, and academics about positions towards the transition in the world today policies and impacts, and especially the form of U.S.-Japan relations in the context of regionalism, the Asia-Pacific Economic Cooperation (APEC), the Asian Regional Forum (ARF), the North American Free Trade Agreement (NAFTA) and its effects on the prospects of regional cooperation and stability in the Asia-Pacific region. And I was impressed with great depth of the student's knowledge about the world transition and regionalism cooperation strategies that many of students had. The students were forthcoming with their views about U.S.-Japan relationship should be more independent than to be subservience or even dependency.

My general impression of the seminar was that, there is a huge amount of eager among Japanese people and students to keep security and sustain economic development in Japan and Asia-Pacific region. I would like to see Japanese students seeking more about the confidence factors, forms, and policies, which may offer to Asia-Pacific region's countries, especially after the increasing in the international integration economy. Undoubtedly, the U.S.-Japan interaction is essential for economic development and other aspects but I would hope that Japan takes a big role in the contributions of the international economic development in general and in the Asia-Pacific region-in particular. It is the chance era of Japan, that may be valid now.

The seminar was a useful experience for me and fulfill by many of discussions. Added to that, I had very interesting friends through over the world and it was a great chance for interaction, the exchange opinions and imaginations. I would like to thank very much the organizers for their great efforts supported and the teachers for their open mind and devoting their time to the seminar. (エジプト)

く、その方法は断念した。

けれども、歴史の変遷や大きな流れを見ていくことで、各々の中に日米関係のダイナミズムを形成することはできたのではないかと。

特にAセクションには、国際関係専攻の学生のみならず、経済・西洋史・日本史・英文科専攻、環境や開発援助に興味のある方まで、個性的な学生が多かったので、ユニークな意見が活発に出て、多角的な見方、考え方ができるようになった。ただ、やはり時間的制約によって、日米関係の将来の展望について、各人が考えを煮詰め、相互に理解し合い、より深く議論していくことができなかったのが残念だった。

私は今回のセミナーを通して、自己の新たな一面を発見することができたと思う。セクション内での討論や他の学生達との相互理解に努める中で、自分とはどのような存在なのか、また周囲のために自分は何ができるのかについて客観的、相対的に考えることができ

るようになった。今回のセミナーでの数々の経験を励みにしつつ、今後ともaction-oriented intellectualになるべく、努力していきたい。

バイ(二国間)とマルチ(多国間)の両方の視点から

筑波大学大学院修士課程 藩 亮

Dセクションでは「アメリカの政権交代の視点から見た日米関係」というテーマをめぐって大変活発な議論が繰り広げられたが、これは日米以外の国から来た私にとっても非常に勉強のチャンスであった。

一つは日米関係は果たしてバイ(二国間)のレベルで処理できるような問題なのかということ。現に、Dセクションにおける議論は日米両国関係の枠組みをはるかに越え、中米関係、中日関係、朝鮮半島または台湾海峡の緊張緩和、そしてAPECやARFの将来などアジア全体に及んでいた。その背景には、国際的相互依存の進展とそのアジア太平洋地域への波及により、日米両国だけでなく、この地域のあらゆる国々にとって他国との関係を無視して、ある特定の国との二国間関係の強化に没頭することはもはや不可能になったという現状がある。

そこで、日米関係を含む二国間関係を勉強、または研究している我々学生にとって本格的な研究に入る前に、まずいかなる方法でバイとマルチ(多国間)の両方の視点から自らの研究を進めていくかをよく考えておく必要があるのではないかと。とくに、私自身は今後アジア諸国の対外行動に関する比較分析を試みたいので、この問題の解決はこれからの研究にとっておそらく最も重要な作業になるだろう。

もう一つ、セクションの討論を通じて、出席者のみなさんから得られた問題意識がある。セクションの半数以上の参加者は、国際関係あるいは政治学以外の分野を専攻してい

るが、彼らは国際政治専門の私に自分の学力不足を思い知らせるいい機会を与えてくれた。二

今までの勉強では、固定化されたアプローチに基づいて国際関係を分析する習慣がついていたので、多くの問題点を看過してしまっていた。自分の専攻以外の多くの方々から一見「素朴」ともいえるような問題が数多く指摘されたが、よく考えてみると、その中で自分の知識ではなかなかうまく答えられないようなものも多くあった。かくして、彼らとの議論をきっかけに、将来の研究において国際関係の原点に立ち戻りながら、新たな問題点の発見に努める必要性をあらためて認識させられた。

この度のセミナーに参加して得られたこれらの知的刺激を無駄にしないように、一層勉学に励んでいきたい。(中国)



絶滅論

▼主題講演

東京大学大学院理学系研究科助教 松井孝典氏

▼シンポジウム（講義と演習）

1 生物の絶滅パターンとその原因 河田雅圭氏

2 人類の進化―生物的要素および非生物的要素との関係― 内田亮子氏

3 地球環境と人類の生存と消滅 坂田俊文氏

東海大学情報技術センター所長 坂田俊文氏

東京大学大学院理学系研究科助教 松井孝典氏

専修大学法学部教授 長谷川真理子氏

早稲田（6）、国際基督教（5）、東京（4）、筑波・東京薬科（各3）、帝京・東海・東京農業（各2）、東京医科歯科・東京学芸・東京工業・横浜国立・上智・中央・東京理科・法政・東洋英和女学院・東京都立短期・白梅学園短期・日本大学短期（各1）、その他（5）

現在、人類は生存の危機に瀕している

かのように言われることが多い。環境問題、資源・エネルギー問題、あるいは人

口問題、食糧問題など確かに我々の眼前には多くの難問が山積されている。しかしそれは人類という生物種が絶滅するかどうかという問題ではない。地球システムのなかで人間圏は安定な構成要素であるか否かが問われているのである。

地球システムにおける物質・エネルギーの流れという視点から見ると、人類が約1万年前、農耕牧畜というライフスタ



講師陣―前列左より松井・坂田・内田・岡（館長）・長谷川・河田の各氏

⑥

イルを選択したことで、地球システムの構成要素のひとつとして新たに人間圏なる物質圏が誕生した。文明とは人間圏の内部システムに関わる事柄と理解することができ。これに対し、それ以前のライフスタイルである狩猟採集は、生物圏の中に閉じた生き方である。それによって人類はその誕生以来四百万年以上も及ぶ長い間、安定して生存し続けることができたといえよう。

人類は生物圏という小さなサブシステムの物質・エネルギーの流れを利用する生き方から地球システムというもっと大きなシステムのそれを利用する生き方に転換したために、生存可能な人口を飛躍的に増大させ、現在のような状況を迎えるに至った。全ての問題は地球システムと人間圏の関係につながる。従って、問題を単に人間圏誕生以後の人類の歴史に普遍性を探る従来の人文・社会科学的枠組みの中でのみ論じるのでは十分ではない。少なくとも地球システムの歴史という時間スケールで問題を認識、分析し、議論することが必要である。

今回のセミナーでは、絶滅とは何かに基づいて現在の文明のあり方、未来を探り、そして地球システムの中で安定した人間圏の内部システム（すなわち政治、経済、社会システムなど）をいかに構築すべきかをめぐって議論した。

参加者の感想から

疑問を持ち、物事を考える姿勢が大切

国際基督教大学教養学部3年 中山 桂

私も、「絶滅論」……何か仰々しくて恐ろしい、しかしなぜか見た人を引きつけるテーマに捕まった一人でした。しかし前日まで大学の実験室にこもっていたので、指定された文献に目を通すことなく当日を迎えました。そのせいか、私はセミナーに参加している間、三つの大きなゴカイに振り回されてしまいました。

セミナーが始まってすぐ、松井先生が言われた「地球の歴史は汚染の歴史である」という言葉は衝撃的で、真っ白な頭にさっと吸収されてしまいました。このたった一言で、「絶滅論」に対するイメージの方向性が作られてしまいました。しかし今思うと、この最初に抱いた絶滅へのイメージは、その後の私の「絶滅論」理解で生じた混乱の根源であったように思います。

人間中心の考え方は、人の歴史が生命の歴史の中で非常に短いという感覚を鈍らせ、絶滅を長いタイムスパンで捉えることを妨げています。人と同時代に生きてきた動物の絶滅の歴史は、否が応でも保全という言葉を連想させます。この鈍った感覚で、私はセミナー中、絶滅と保全を切り離して考えることができませんでした。これが第一のゴカイです。

第二のゴカイは絶滅率を示した表によって起りました。各地質年代における絶滅率をプロットした、まるで白い紙の上に黒ゴマを振ったようなその表を見て、たとえ低い割合で起る日常的な絶滅と高い割合で起る「大絶滅」とが区別されるものなのか、そのデータの少なさをゆえに統計的検証ができないと

しても、「大絶滅」と呼ばれるものが生物の突
然の消滅という感覚を持ったのは私だけでは
ないでしょう。

次に見た、同じく絶滅の割合を各地質年代
上にとり、それらを直線で結んだ山あり谷あ
りの表は「大絶滅」の周期性に対する問題提
起に使われたものでしたが、私の中では第二
のゴカイをサポートする事実として理解され
てしまいました。

つまり、表に示された周囲から飛び抜けた
ピークは「大絶滅」があたかもその年代の瞬
間に生じたものであるような感覚を強めてし
まったのです。実際に表の横軸に示された地
質年代は、想像をこえた長い時間を示すも
のである上、「大絶滅」が瞬間
に生じたようにみせるそのビ
ークは十分に正確な資料が得
られないために、そのような
形状をしていると分かったの
はセミナー後でした。

第三のゴカイはセミナー全
体に関するものです。第一の
ゴカイ、つまり絶滅を捉える
ための時間感覚を鈍らせてい
る上、人間中心主義の保全に
対する不自然な正義感と倫理
感にとらわれながらセミナー
に参加していた私は、セミナー
の背後に流れる主催者の意図が全く読み
取れず、困惑の渦に巻き込まれてしまいま
した。

先生方の示される具体的な生物の絶滅の
歴史、仮説、その他の情報はすべて断片化
され、バラバラと私の中に入ってきてお互
いにまとまることなく、形のないまま居座
っていきます。困惑は不安に、不安は不満
に姿を変え……。つまりは、セミナー中イ
ライラしていたということです。他の参加
者の中にも同じ状態の方はいらつしやった
のではないのでしょうか。



通信衛星からの写真を見ながら
文明の盛衰を説明する坂田氏と
聞き入る参加者たち



そのせいか、最後の全体討論会では絶滅そ
ののから保全、エネルギー問題にまで至る
内容が取り上げられました。私もそうであっ
たように参加者の中には自分の作り上げてし
まったイメージの中から抜けだすことができ
ず、セミナーの雰囲気と違和感を感じつつ
も、その原因が分からないでいた方にとつて
全体討論会こそ、その困惑をぶつける唯一の
場であったわけですね。

先生方がそれを察して下さっていたかは分
かりませんが、結果としてセミナーの発表に
そぐわない質問と質問とかみ合わない答えが
行ったり来たりだったように感じました。そ
して私の中でセミナーは尻切れトンぼで終わ

ってしまったのです。しかし、これこそ第三
の、そして最大のゴカイでした。

セミナーが終わってから数カ月が経とうと
しています。この感想文を書きながら、重大
なことに気が付きました。あんなに困惑と不
満を抱いた、断片的でまとまりなく、強引に
私の頭を占領した情報がいつの間にか、はつ
きりとした形をなすまでは及ばないものの、
それぞれ何とか居場所を見つけたようなので
す。

あるものは天文学の知識の中に、あるもの
は生物の知識の中に、あるものは人類学の知
識の中に、あるものは私自身の価値観の中
に、そして未熟ではあってもそれらは「大絶
滅」というキーワードで検出されるような回
路を形成していることに気付きました。そし
てこれらの単語の検出には必ず、セミナーで
感じたあの強い困惑と不安の感覚がリアルに
呼び起こされ、私を刺激します。

セミナー後、比較的すぐに解消された第一
と第二のゴカイとは量・質ともに、ひと味も
ふた味も違う第三のゴカイは解消するのに大
変な時間とエネルギーを必要としたことにな
ります。しかし、この点だけをともしてもセミ
ナー「絶滅論」は大成功といえるのではない
でしょうか。ゴカイという言葉がカタカナで
書いたのはそれ自身私の抱いた疑問であつた
からです。今回のセミナーを通して、疑問を
持ち、物事を考えるという姿勢の重要性を身
を持って学んだ！ というのも、この場を借
りて述べておきたいことです。

地球環境問題は地球の歴史的な 変化を踏まえて

法政大学経済学部3年 渡辺照子

私は今回、初めて大学共同セミナーに参加
し、講義内容や先生方、参加した仲間から大
きな刺激を受けた。はつきり言って、カルチ
ャーショックだった。私は経済学部・環境文

化コースを専攻しており、環境問題に対する
グローバルな視点と共に、具体的な対策、例
えばリサイクルを、市場経済システムに合っ
た形で実践していくためにはどうすればいい
か、ということ学んでいる。

けれども今回のセミナーのように、このま
まいくと、人類は絶滅するのではないかと
いうことを、地球誕生以来の大きなスケールで
捉えてみたことはなかった。今回のセミナー
で、地球環境問題は、地球の歴史的な変化を
踏まえた上で、現状の対策にとりかからなけ
ればならないと感じた。

私のセミナー参加の目的は、先生方の講義
を聴くことと、他大学の学生に接し、友達に
なることだった。5、6校の大学の学生と親
しくなり、大学の様子や専攻内容などの情報
交換ができた。初めて聞くような彼らの専攻
内容は興味深かった。プログラムの時間外に
も集まり、初めてあった人同士で気持ちよく
話し合えることが嬉しかった。自分の将来に
対する考え方や、今持っている価値観など、
普段は親友としか語らないことを話し合える
友達もできた。その内の一人とは、セミナー
後も連絡を取り合っている。

先生方と学生が一緒になって、20人以上で
ディスカッションをした時、自分の考えを短
くまとめ、相手に分かり易く伝えることの難
しさを実感した。私の普段の大学生活では、
今回のセミナーのような白熱した意見交換は
体験できないものであり、自分の勉強の足り
なさ、問題意識の薄さを痛感した。

一泊二日という短い間だったが、参加する
前に想像していた以上に、私にとっては充実
したセミナーだった。問題意識をしっかり出
会えたことに感謝している。今回受けた様々
な刺激を活かし、もつといろいろなことを学
んで、私なりに考え、行動できるようになり
たい。

カリキュラムを活かす

▼講演

大学教育のアカウンタビリティとカリキュラム
 玉川大学文学部助教授 田中義郎氏

▼提題

A カリキュラムの視座とFDの課題
 亜細亜大学教養部教授 原 一雄氏

B 高校新課程からの視点―科学教育を中心に―
 国立教育研究所化学教育研究室長 松原静郎氏

C カリキュラムを実現する枠組み
 国際基督教大学長 絹川正吉氏

▼運営委員

東京学芸大学教育学部教授 小林志郎氏

中央大学商学部教授 建部正義氏

東京外国語大学外国語学部助教授 丹羽 泉氏

電気通信大学電気通信学部教授 中田良平氏

東京女子大学文学部教授 福田一郎氏

千葉大学園芸学部教授 山内正平氏

東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢氏

立教大学文学部助教授 佐々木一也氏

【参加者】85名68校(講師・運営委員をのぞく)

東海・武蔵工業(各3)、岡山・山形・東

北学院・恵泉女学園・芝浦工業・東京女

子・東京電機・九州東海・沖縄国際・桜

美林短期(各2)筑波・東京医科歯科・

東京商船・電気通信・新潟・金沢・山梨・

信州・奈良教育・広島・山口・長崎・岐

阜薬科・大阪市立・熊本県立・北星学園・

北海道医療・足利工業・国際医療福祉・

跡見学園女子・聖徳・千葉商科・東京基

督教・工学院・国際基督教・上智・清泉

女子・専修・大東文化・東京工科・東京

工芸・東洋・日本・日本女子・明星・立

教・麻布・神奈川・神奈川工科・敬和学

園・新潟国際情報・松本歯科・静岡産業・

静岡理工科・愛知淑徳・ノートルダム女

子・大阪医科・立命館・兵庫医科・高野

山・ノートルダム清心女子・広島経済・

産業医科・中村学園・神奈川大学短期

(各1)、防衛大学校(4)

カリキュラムは改革したけれど、教育

の本身は果たしてどれほど良くなったの

か。これは大学教員がよく口にする言葉

だが、決してただの愚痴で済まされる事

柄ではない。大学設置基準の大綱化とい

う半ば外からの働きかけによって促され

た今回のカリキュラム改革を、私たちは

今一度原点に立ち戻って見直さなくては

ならない。今回の研修では、教授団の資

質開発の出発点となる自己点検の作業を

カリキュラム一点に絞り、じっくりと討

議することがねらいであった。田中義郎氏の講演については、11頁に要約を掲載した。また提題と分科会での議論については、ファシリテータの報告をご覧いただきたい。

⑧

●第1分科会(田中氏を囲んで) 教員のライフスタイルの 変化は可能か

中央大学商学部教授 建部正義

田中義郎氏の講演を受けて、分科会では大学教育のアカウンタビリティ、カリキュラムを活かす、教職員のライフスタイルの変化という三つのキーワードで討論を行なった。本年1月に発足した大学行政管理学会は、まさにしか来ない教員に大学の改革はまかせられないとの趣旨で設立されたとの噂さえあるが、教員のライフスタイルの変化はそういう職員サイドの動きからも強く要請されつつあるといえよう。

ところで、今回は二日間にわたり分科会で討論したが、参加者に二つの課題を残した。

第一に、大学教育のアカウンタビリティというのは、これまで一般にいわれてきた大学の社会的責任と内容的にどう異なるのかという点である。アカウンタビリティは最近、各方面で広範に見かける言葉である。たとえば、筆者が専攻する金融論の分野でも「日本銀行法」の改正問題に関連して中央銀行のアカウンタビリティということが盛んに議論されつつある。大学教育のアカウンタビリティといった場合、他の分野と異なるその特質をいったいどこに求めるべきであろうか。

第二に、教員のライフスタイルの変化についても、文系と理工系、教員と職員の違いの他に大都市と小都市の差異が問題になる。た

とえば、セメスター制を採用し週2回の授業を教員に義務づけた場合、相互に非常勤講師を融通し合っている地方大学では、ライフスタイルの変化が教員自らの首をしめる結果につながりかねない。はたしてこうした障害をどのように位置づけるべきかに疑問が残った。

●第2分科会(原氏を囲んで) 教員の意欲を引き出す工夫

東京外国語大学外国語学部助教授 丹羽 泉

参加者の所属する大学では、すでにカリキュラムの見直し、または改革プロセスが進行中という段階であった。そこで分科会の前半は、参加者が原氏の提題を念頭に置きながらそれぞれの直面している問題を率直に披露し、現場で実行している工夫や実践例などを具体的に報告する形で進行した。その過程で、教員の意識改革、教養と専門との連携、



●第2分科会

チームティーチング、改革の機運の中で生まれた新たな試みの定着などの問題が論点として浮上した。

分科会の後半は、前半に浮上した論点をめぐって踏み込んだ議論が行なわれ、いくつかの示唆的かつ有益な意見交換があった。たとえば、教員の意識の問題を個人の資質に還元するだけではなく、教育と研究の両立が可能な環境を醸成し教員の意欲を引き出す。議論は、そのための教育業績の評価やサバティカルの活用に及んだ。また新しいカリキュラムに伴って生まれたチームティーチングについて、共同でテキストを編集し、講義は自分以外の教員の執筆部分も含めて行なうユニークな実践例が紹介された。

他にも教養科目を全学的に運営することによって責任主体が曖昧になったという報告の一方で、教育改善を目的とした研究会が学部を越えて教員の自発性に基づいて組織され、成果を生みつつあるといった例なども報告された。

●第3分科会（松原氏を囲んで）
理数系基礎学力をどう身につけさせるか

電気通信大学電気通信学部教授 中田良平

自然科学系学部で専門基礎教育を担当している方々が多数を占めた理由は、大学専門教育の基礎となる科目を「未履修」で入学してくる学生と「理数系基礎学力」をそもそも備えていない学生の教育が問題となっている。えに、高校新課程理科カリキュラムで履修した学生がこの4月に入学してくるという事情からである。

分科会は、はじめに松原氏から理科教育の視点の変遷、高校理科教育の現状について提題の補足説明があり、その後で参加者から新

入学生に対する自然科学教育が抱える問題点と現在行なわれているその対応策について具体的な報告と活発な討論がなされた。

まず、松原氏からは高校進学率の上昇にと関係のない、これまでの系統的な理科学習から社会の流れに沿った「問題解決、生活探求」型へと学習内容の方向が変わった経緯についての説明があった。また、同氏は理科系教育レベルの国際比較の結果を示しながら、進級とともに理数嫌が増えることを統計的に明らかにした。この理数離れの原因として、授業が理解中心の日本とスキル獲得中心の米独との差が考えられるとの話であった。



●第3分科会

理科教育の事例については、高校理科も従来の知識、理解等に加えて新課程では意欲、判断、表現が成績評価に加えられていること、高校生の理科科目の選択には総合理科を教える先生の負担もさることながら、大学入試科目が大きく左右しているとの説明があった。

高校新課程カリキュラムについては学生の理数系基礎学力に関する討論が続いた。自然科学系教育は基礎学力の差に大きな開きがある学生たちを同時に教育することの難しさから、学力のない学生には補習授業を行なう大学が増えてきている。高校新カリキュラム改訂にもない、早晩、補習授業を実施せざるを得なくなることが予想される。

以下、補習授業の現状についてまとめてみる。入学試験後に行なう試験で学生を振り分けクラス編成する。授業には教員やチューターがあたり単位を認めることもある。コンピュータを用いた自習を行なっているとの報告もあった。授業を組む時間は5学時限で、期間は半年もしくは1年である。

入学試験が学生を選択するフィルターとして働かなくなりつつある昨今、この分科会が新しい大学教育を考える一つの機会を与えてくれたのかもしれない。

●第4分科会（絹川氏を囲んで）
カリキュラム改革は構造的な問題として取り組む

千葉学園大学学部教授 山内正平

この分科会では絹川正吉氏の提題をめぐって討論が行なわれた。参加者の関心は、カリキュラムが変われば大学教育は変わるのかという素朴な疑問にあった。たとえば、カリキュラムを活かすための時間割が教員の希望に沿って埋められていく現状をどう考えるのかといったことである。このような疑問を受け

て絹川氏は、大学教育における教員側の問題を個人レベル（特に教員のモラル）ではなく本質的、構造的に捉えるという事例としてICUの学習支援システムであるアドバイザー制度とGPA（Grade Point Average）を紹介し、大学教育および学生への関わり方の基本的な姿勢と方向を示した。

ICUは、1年を10週間ずつの3学期に分け、授業は学生の集中力の限界を勘案して70分週3回、3単位という制度である。また、カリキュラムは学生が自分で設計することになっているため、アドバイザー制度とGPAが学習を支援する。GPAは学生にとっては学習の指標である、と同時にアドバイザーにとっては助言の指標として重要な意味を持つ。もちろんGPAが機能するには、まずそれが根付く環境の整備が問題で、評価の客観性が維持されなければならない。

分科会の前半は、参加者の関心が高かったこの二つのシステムを中心に質疑応答と意見交換があった。ICUのアドバイザー制度は、他大学の基礎ゼミ、クラス担任等とは本質的に異なり、教員と学生がパーソナルに結びついている。しかし、教員の負担、教員と学生との疎遠な関係はICUにも共通の問題として指摘され、学生のインセンティブを高める方策、人間関係の形成、私語への対処などが話題にのぼった。

GPAに関しては、絹川氏からそれが求める評価の客観性は教員や学生の数量的管理や序列化ではなくコミュニケーション内および社会に対する信頼性の確保と結びつくものであり、教育の質をいかに維持するかにかかるといふ補足があった。シラバス等によって教育を透明化し評価の公正さによって教育の信頼性を大学内外から獲得することはFDの重要な課題でもある。

分科会後半では、セメスター制を中心に議

論が展開され、時間割を組む際の問題点が提起された。現実的にはセメスター制にいくつかの形態があることがわかったが、それを採用する内発的な教育改革の動機に関する議論が不足した点が反省される。そもそも制度が教育の中身まで変えることができるかどうか、大学というシステムの中で教員が個として大学教育にどのように関わろうとするのか、本質的な問題が積み残された。

●第5分科会

教養科目を効果的に運用する組織と制度はどうあるべきか

立教大学文学部助教授 佐々木一也

この分科会グループは、特定の講師の提題にこだわらず、運営委員の宮腰氏を中心にカリキュラムについて総合的に議論した。大綱化に沿って一般教育の組織を廃止した大学からの参加が多く、主に一般教育課程のカリキュラム改革と教員組織の改編の関係について議論した。論点を列挙すると教養科目担当意識の風化、委員会方式の形骸化、教育業績の曖昧な位置づけ、教養科目の低い位置づけ、分属後の語学カリキュラムの困難、専門・語学の科目担当の不均衡・不公平、差別的な意識と処遇、負担増などであった。

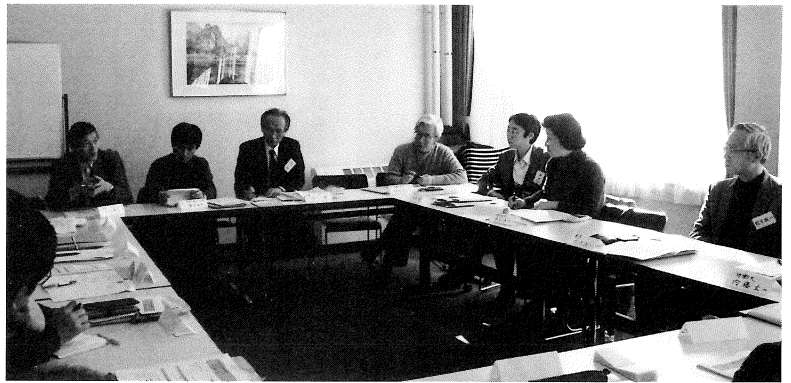
逆に、教養学部に格上げし教養教育重視理念を形にした東北学院大学の例も紹介された。ただしキャンパスが分かれていることもあって、専門科目担当の学部との間に意志や連絡の疎通があり、カリキュラム改革の対応の速さ、全学的見地からの人事構成、4年一貫のカリキュラムなどの点に支障があると指摘された。その中で立教大学の事例報告が参加者の関心を呼んだので略述する。

立教大学では全学の合意という民主的手続きによって一般教育部は解体され、代わって

教養教育に関心を持つ教員が指導的役割を担う全学共通カリキュラム運営センターが発足した。ここでは旧一般教育科目を発展させる工夫と努力がなされていて、大学教育一般の改善と大学を取り巻く諸状況を考慮に入れて全学的に利害と関心に関わる授業内容、分野割り振りおよびコマ数、専任と非常勤の担当比率、専任および非常勤人事などについて活発に本音で議論している。

その努力が徒労に終わらないために関係者一同は、時に利害、立場の違いを越えて団結して当局と交渉し、予算措置を伴う新企画を実現するなどの成果を上げている。それはこの組織が全学部によって支えられているという建前があり、予算面でも学部と同格の位置づけがなされ、特に語学担当者の新任人事では学部を上回る人事権を持っているからである。

ところで委員会方式に移行した大学における教員意識の改革の必要性がこの分科会でも論じられたが、文部省が教員評価について旧来の研究業績重視の方針を捨てておらず、現状の大学教員は二律背反に引き裂かれているとの指摘もあった。教員はカリキュラムと教育に今まで以上にエネルギーを注ぐと同時に、設置申請はもとより任期制導入の動きに対して研究業績をこれまで以上に積み重ねられなくなつた。このような困難な状況で、しかも制度的にも予算的にも十分な裏付けのないカリキュラム改革は、これ以上持ちこたえられそうにないという危機感で参加者は一致するに至つた。問題の深淵は科目の必要性と組織改変とのあいだのずれにあり、教養科目を効果的に運用することのできる組織を制度化するのが今後の課題といえよう。



●第5分科会

●参加者の感想から 人事権をもった強力な委員会で改革を

立教大学法学部教授 所一彦

立教大学では、一般教育課程を全面的に改訂した全学共通カリキュラム（略して「全カリ」）が、この4月から実施されます。旧一般教育課程を運営していた一般教育部が解体されて代わって全カリの運営にあたる「全カリ運営センター」が、各学部の代表からなる運営委員会の下に組織されました。私はその長を務めることになり、勉強になるからと勧め

られてこの研修に出席したわけですが。はじめは半信半疑、あまり気乗りのない感じで聞いていましたが、聞くうちにだんだん引き込まれ、やがて立教のことも話すことになり、ついにはすっかり虜になりました。何よりも、この4月からの仕事にある種の自信が得られたことが大収穫でした。

私の所属した分科会では、大綱化に伴うカリキュラム改訂がどのようにして行なわれ、実施されているかを紹介し合いましたが、どこでも似たようなことを、しかし少しずつ違ったやり方でしているようであり参考になりました。立教は徹底した全学的な討論の下に実質的な改訂を進めたモデルケースなのだそうですが、それがなぜ立教でできたかという点、全カリ運営委員会が全学の最高決定機関である部長会に代表を出し、人事権まで行使する強力な委員会だかららしいということが判って、大いに意を強くしました。

共通カリキュラムの運営にあたる全学的な委員会はどこにもあるのですが、権限が弱く、したがって調整力が弱くうまく機能しないところが多いようでした。複数の教員が共同して担当する「総合B」も、委員会が強力だからこそ立派にできた例でしょう。似たような科目は他の大学にもあるのですが、立教では常時複数教員が出席する形態の「総合B」を一定数確保するため、1コマあたり3コマ分の非常勤講師手当枠が用意されたことを紹介すると、大きな溜息が聞こえました。

もともとこの改革が本当に成功したかどうかは、もっと先になって判ることです、少し判ってきたところでまた皆さんと話し合いたいと思いました。

大学教育のアカウンタビリティとカリキュラム

玉川大学文学部助教授 田中義郎



たなかよしろう／一九五五年生まれ。専門は比較・国際教育学、比較高等教育論。共訳書に「ハーバード大学の戦略」「アメリカ大学の優秀戦略」などがある。

●進まない授業方法の改善

3年程前に私が実施したアンケート調査では、全国の約半数の大学でカリキュラム改革が実施され、教授陣の活性化は6割以上の大学で行なわれていました。

入試の改革についても、国立はセンター試験のあり方が変化した時期であり、私立でも多種多様な試験形態になっていました。しかし、授業方法の改善については、何らかの方策を行なっている大学は非常に少なく、カリキュラム改革も入試改革もしたけれども、授業は変わっていないという実態が浮かび上がってきました。制度改革は比較的速やかに進行するけれども、人が関わる改革はなかなか進まないあたりに大学改革の問題点が浮かび上がってきました。

それぞれの大学にはそれぞれの創立理念があり、学生にこう育ってほしいという理想像があります。カリキュラム本来の姿は、学生をどう育てていくか道筋をつけることです。今日、カリキュラム改革には、学生にどんなカリキュラムを提示すればしっかり育つかという視点が不可欠です。それに対して、学生は自分の価値観や趣向によって教育を選択する自由意志を持っています。そこで、それに

呼応するかのようには、大学でも選択科目を増やし、学生が自由に科目を履修できるように工夫が採用されるようになり、自由な科目が取れるということも、学生に指針を提示し、相談相手となるアカデミック・アドバイザーの存在は欠くことができません。そこで、教員に新しい役割が期待されるようになっていきます。

●補正教育を据えたカリキュラム改革

現在、18歳人口の減少が顕著になり、一部の大学では定員割れもおきています。一方で、大学進学率は上昇し、近い将来には大学志願者全員入学の時代が到来するでしょう。一昔前、「大学生Ⅱエリート」という公式が適用できた時代には、学生が勝手に育ってくれました。彼らには、また社会にも、彼らに対する鮮

明な大学生像・エリート像があり、将来についても明確で確実な選択肢がありました。ところが、大学の大衆化はこうした常識から人々を解き放ち、今ではどこにでも大学生がいて、こうした大学生の多くは、不鮮明な学習動機と不明確で不確実な自己将来像によって特徴づけられています。そこで、大学は、彼らの学習に対してあえて方向づけを行ない、将来

に向けて付加価値を提供しなければなりません。また、これから高校の新カリキュラムを経て入学してくる学生の知識はその履修形態の自由さ故に極めて多様です。現状では、「習っていないから知らない」と主張する学生と、「大学に入學する前から知っていたり前だ」と主張する教員との葛藤がますます顕在化するでしょう。今後、こうした多様な学生にどういったカリキュラムで対応するかが大きな問題でしょう。何を知っているかを問題とするのではなく、どういった基礎能力・技能をもっているかをカリキュラム構築の基本的な枠組みとする必要がでてくるでしょう。そして、それぞれの学位授与分野ごとに卒業までにどういった能力や技能を發展させ修得させるべきかを念頭に置いたカリキュラムの構築が必要とされるでしょう。

●教員のライフスタイルの変化を

私たち大学人は、今、誰のために、何のためにカリキュラム改革と取り組んでいるのでしょうか。デービット・リースマンは、「学生消費者主義の時代」という表現で、今日の大学教育が消費者である学生の支持なしに存続することが困難であることを示し、改革の必要性を示し

ました。FDを通じた今日の大学教育の活性化のための活動も一連のそうした改革活動の中に位置づけられています。しかし、こうした大学人の努力にも関わらず、我が国の大学では、教員（教育）と学生（学習）の最適な関係がなかなか築けないで見受けられます。また、教育施設・設備の最適化、学期の最適化、カリキュラムの最適化などの大道具改善と授業の充実、シラバスの充実、奨学金の充実などの小道具改善が実現すればさぞやすばらしいと思われる改革が検討され、また、一部の大学では実際に実施されています。にもかかわらず、最適な関係を築けないのはなぜでしょうか。今日の大学カリキュラム改革の中で何が欠けているのではないのでしょうか。変わらなければならない大切なファクターが何か改革議論の外に置かれていないのでしょうか。思うに、改革後の体制に向けて、教員のライフスタイルの変化が遅れているからではないのでしょうか。きめ細かな指導や補正教育をすれば、学生指導のための時間が増加し、同時に指導技術の変革が必要で、少人数にすれば、担当コマ数が増加し、同時に指導技術の変革が伴います。

「変革は必ずしも進歩を保証するものではない。しかし、進歩には変革が是非とも必要なのである」とヘンリー・コマジャーが言うように、変革の後に来る新たな体制に対応できる教員のライフスタイルの変化は是非とも必要なのです。

平成8年度 交友館委員会

第5回'96年12月2日、第6回'96年12月8日／
大学セミナー・ハウス

【出席者】(委員) 宇野重昭、(法人) 佐野博敏
理事長、岡宏子専務理事(各回とも)

●各回の主な議題

交友館の運営方針の再検討、(有)交友館の
廃業と同館の経営に関する(有)大学セミナ
ー・ハウス食堂との委託契約の締結、他。

平成8年度 第4回大学教員研修プログラム委員会

'97年2月4日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、福田一郎、佐々木一也、
建部正義、中田良平、宮腰賢、山内正平、小
林志郎、丹羽泉

【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ3名
●主な議題

第13回大学教員研修プログラムの実施報告、
平成9年度大学改革推進等経費の申請、委員
の補充、「講演集」の作成、第14回大学教員研
修プログラムの企画、座談会のテープ起こし、
新版FDハンドブックの編集、今後の委員会
の人事、他。

平成8年度 第3回共同セミナー委員会(正副)

'97年2月14日／アルカディア市ヶ谷

【出席者】宇波彰、伊藤正直、長谷川真理子
【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ2名

●主な議題

次年度人事、他。

千人会

'96年12月～'97年2月

◆ご入会ありがとうございました

◇鶴田忠彦殿・一橋大学教授／A

◇渡辺弘道殿・

(株)リサーチ・エム・エム／C

◇並木信一殿・

(財)東京YMCA本部事務局／A

◇森茂殿(社)日本交通協会副会長／A

▼会員数11、四二四名

◆会費ありがとうございました

外池孝雄、渡辺恭章、岡惺治、戸田三三冬、吉
武泰水、尾田幸雄、茂木誠陸、大谷慎之介、折
田政博、鬼塚宏太郎、内藤正、岸良範、生山
智己、松本幸一、田中慎也、山田暁、池田貞
雄、片桐元、山本襄治、池田温、平木典子、上
田和宏、市川孝正、吉田豊、茅伊登子、竹内
啓一、澤谷卓成、塚本利明、岩崎不二子、住
田友文、慶伊富長、清水誠、小西正捷、大塩
俊介、濱川祥枝、半谷高久、有山正孝、金台
然、山田圭一、岡崎正、八杉貞雄、三浦永光
飛田茂雄、横沼健雄、石田孝夫、田中國昭、青
柳総太郎、大河内繁男、伊藤学、上田明子、小
林哲也、福原満洲雄、松尾章一、来住正三、有
馬弥子、高野雄一、川端香男里、甲斐隆、佐
藤共子、西川道治、合田信子、黒田成俊、佐
藤進、石井素介、長坂舜一、示村悦二郎、大
川信明、鶴田忠彦、師岡孝次、矢澤修次郎、三
浦安子、後藤聰一、森久、小山弘志、竹林代
嘉、竹村憲郎、鈴木皇、小菅敏夫、武田昌輔、

齊藤耕二、深澤實、油井大三郎、坂坂純子、並
木信一、加藤一郎、高橋恒郎、村上健、浮田
久子、大森東亜、一番ヶ瀬康子、佐々木良一、
川崎正三、志鳥學修、慶谷壽信、出光直樹、森
茂、上山碩、乾崇夫、柳澤富雄、吉川孔敏、西
川大二郎、平川紀一、渡辺忠胤、中島力、山
口桂子、中富光國、松山正男、小野寺嘉孝、麻
生幸、古田勝久、田島信元、東川清一、上谷
琢之、高橋昭三、新井明、池井優、佐藤音彦、
茅野良男、小川洋輔、鎮田和夫、清水畏三、越
智昇、石川道夫、海老沢信一、谷口修、小川
政亮、藤巻正生、猪瀬博、小保武夫、江村裕
文、本谷勲、根岸愛子、鈴木博、新保清子、柳
父園近、佐野博敏、松澤正夫、東洋、金子ハ
ルオ、寺東寛治、昌谷春海、山口俊夫、建部
正義、石井正博、富沢賢治、松田安弘、板垣
正三、鈴木陽子、谷資信、原田敬一、田原勤
意、矢田俊文、藤井良治、井原恵治、新澤雄
一、遠藤平治、高橋和之、箕輪成男、本田和
子、森昭彦、北原文雄、大岡信、斎藤真、外
間寛、福永壽巳夫、亀岡篤、野澤辰、山本和
代、小林一彦、栗原尚子、磯田浩、福田敦夫、
馬越徹、泉敏彦、高橋たまき、中村妙子、西
川恭治、笠耐、高松正昭、彦由一太、増澤利
幸(敬称略)

おたより

●先日、F H(国際飢餓対策機構)推進理事
として、ドミニカ共和国、ペルーを視察する
機会を得ました。又来年7月から国際ロータ
リー二五八〇地区・沖縄分区分代理に指名。主
をはこんだロバとして仕えるつもりです。

(沖縄天久神の教会牧師・折田政博)
●小生は丹木の丘にある創価大学文学部に勤

務して3年余になります。同じ市内の大学セ
ミナー・ハウスの持続的発展は心強い限り
です。(池田 温)

●温かいおことはありがとうございます。お
かけさまで、元気をとりもどし、もとのよう
に動けるようになりました。というわけで、
還暦がピンと来ず困っております。お互いに
身体を大事にして励むことができますように。

(日本女子大学教授・平木典子)
●おかげで仕事におわれ忙しい日々を送って
おります。この年になって仕事におられると
いうのは、日本社会では恵まれた立場にある
のだと痛感し、それにふさわしい仕事をしな
ければと思っております。

(駒沢大学教授・竹内啓一)
●第一線からは引退しましたが、二、三の大
学のお手伝いをしながら、無事消光しており
ます。(大塩俊介)

●70歳の定年まであと1年、なんとか勢いの
ある教育を続けたいと、自らを鞭打っており
ます。(中央大学教授・飛田茂雄)

●本年喜寿を迎えます。病弱の身がどうやら
この年齢まで生き続けられたことは、多くの
方々の支えによることと感謝するばかりです。

(東洋大学名誉教授・大川信明)
●セミナー・ハウスが遠くなりましたが、は
るかにご発展を祈念しております。

(北陸先端科学技術大学院大学教授・示村悦二郎)
●また春にお世話になります。毎年桜の季節
に約50名の学生で合宿することがすっかり
ゼミナールの恒例行事となりました。

(明治大学教授・森 久)
●現在元気で奉仕活動に従事しています。

(前八王子市長・後藤聰一)
●わが家のある赤城山の南側では、晴天でも
降る雪「風華」がカラッ風に舞っております。
大寒に入り、寒さ一段と厳しい折柄、山中に
あるセミナー・ハウスの皆様の御苦労が目
浮かびます。そろそろ、おいしいタクアンが

つけあがる頃です。

●小生が貴ハウスをよく利用していたのはもう25年以上昔。頂いたカードのようなしつとりとした木々は育っておらず、半分ハゲ山でした。その分広がる青空のような明るさがあったような印象が残っています。人間で言えば壮年期、今後ますますのご発展を。

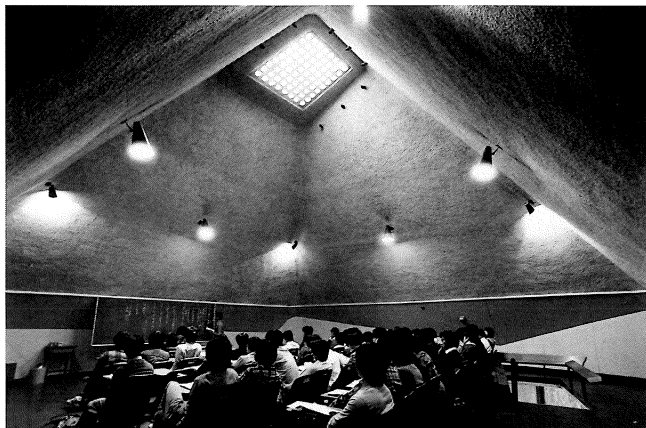
(パシフィック・コンサルタント)

インターナショナル・川崎正三

●昨年末、図らずも日本学士院会員に選定されましたので、この機会に(77歳にもなりませんでしたので、A会員に昇格?)させて頂きます。

(東京大学名誉教授・乾 崇志)

●おかげさまで、72歳になりました。横浜市大時代にお世話になりましたが、90年に名誉教授で退職後、江戸川大学をへて、今、八王



施設紹介/中央セミナー館

子の創価大にいます。近くなりましたので、またお伺いしたいと思っています。よろしくお祈りします。

(創価大学教授・越智昇)

●山梨学院大学も今年創立50周年を迎えました。昨年何度となくセミナー・ハウスで研修をした4年生たちも、今や社会人1年生。現社会人ラクビー「三洋電機」のチームでルーカーとして活躍する木川徹選手もそのひとりです。

(山梨学院大学・海老沢信一)

●私もセミナー・ハウス退職から30年、還暦記念に雪の丹沢登山をやってみました。健康に感謝して残りの人生、大切に過ごしたいと思います。

(元ハウス職員・新保清子)

●大妻女子大学社会情報学部長、2期4年目です。4月には、また学部新入生オリエンテーション合宿でお世話になりますので、よろしく。

(大妻女子大学教授・金子ハルオ)

●先日細雪を見に行きました。その中に「雪子ちゃん今年の花見が終るとすぐ来年のことを心配する」というような台詞がありました。私も来年、又、と思っています。

(石井正博)

●元気で喜寿を迎えることができました。30余年前セミナー・ハウスにお世話になった頃を思い出します。大学教育の横糸として、ハウスが利用され発展することを期待しております。

(東京理科大学名誉教授・北原文雄)

●私はお陰様でマイペースで少しずつ実験を楽しんでおります。私のような視覚研究の領域では観察条件の制御をパソコンにやらせて、私自身が被験者を務めることで結果を探ることが可能です。

(聖心女子大学名誉教授・野澤 晨)

●教育問題がますます重要視されます今日、セミナー・ハウスの御発展をお祈り申し上げます。

(上智大学講師・笠 耐)

●大学改革に関する記事は興味深く読ませて頂きました。(長岡技術科学大学・泉 敏彦)

謹んでご冥福をお祈りいたします

川喜田愛郎氏(元千葉大学長、元セミナー・ハウス理事長、顧問) '77年6月から二年近く、第8代目の理事長として、事多かつた時期にご尽力下さった。'96年12月6日没。(写真

は'91年4月の顧問会で来館された川喜田氏) 小川捷之氏(上智大学教授、元共同セミナー委員) '82年以降ユング心理学で4回の共同セミナー、1回の大学院共同セミナーを企画・運営された。これらのセミナーはいずれも100名を超える参加者を集めた。'96年12月6日没。

松元文子氏(お茶の水女子大学名誉教授)



開館当初より28年来、変わらぬご厚情を寄せられました。'96年12月9日没。鈴木友二氏(元明治薬科大学教授) '76年以来ご芳志を寄せられた。'97年1月4日没。

寄贈図書

'96年12月~'97年2月

『国際化時代の外国語の学び方』

立命館大学外国語FDプロジェクト殿

『癒しのパフォーマンス』

『太平洋国家アメリカへの道―その歴史的形成過程―』

『新グループワーク・トレーニング』

(財)日本レクリエーション協会殿

寄付

'96年12月~'97年2月

〈一般寄付金〉

三〇〇〇円||日本女子体育大学教授・河田喬

夫殿

〈植樹〉

エゴノキ苗木5株||東京都立立川短期大学学

長・岸 國平殿

野村モミジ他9種22株||セミナー・ハウスパ

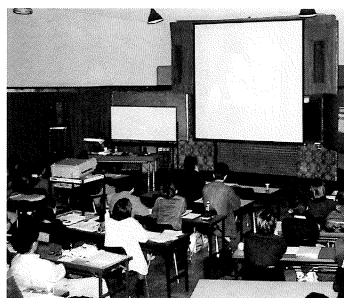
ート職員・飯島吉雄殿

〈現物〉

液晶ビジョン(大型ビデオ投影機)

『乱れたブーケ』(ガボール作)

||東京都立立川短期大学殿



東京都立立川短期大学からの寄贈品
2点(14頁「業務通信」参照)
(上)液晶ビジョン(講堂スクリーン左下のビデオ投影機)
(右)ガボール作のリトグラフ(石版画)



業／務／通／信

96年12月、97年1・2月の合宿研修から

右記冬季3カ月間に迎えた宿泊研修グループは計152であった(16頁「利用状況」参照)。その中から、埼玉大学山口研究室の「卒ゼミ」、東京都立立川短期大学の話題、そしてマレーシア政府派遣留学生第3期生94名の長期滞在(次頁「私の国際交流」参照)——などをご紹介します。

●「卒ゼミ式」は今年もハウスで

2月下旬、今年も埼玉大学山口研究室伝統の「卒ゼミ式」がハウスで行なわれた。2泊3日の合宿の中日、セミナー室でゼミ生手づくりの「卒ゼミ証書・アルバム」が卒業組に手渡された。晴れてゼミ卒業である。

山口和孝教授は80年以來の18年間にこのような合宿を計28回ハウスで実施してこられた。その間、学生からは「温泉付きバック旅行」などの誘いを受けたこともあるが、「私は学生時代からここが好きだから」と一貫してハウスに決めてこられたという。

70年代はじめ、山口教授は国際基督教大学の学生として、ゼミ合宿、心理学セミナー・セミナー、そして新入生オリエンテーションのお手伝いなどでたびたびハウスを体験し、さらに季節の諸行事などにも参加して、ハウスの「コミュニティの生活」を満喫された。いま、その思い出をご自分の学生たちに伝えようとして下さる「ハウス第二世代」の教師の一人

である。「わたしたちの合宿」(左掲)に春合宿紹介の一文をお寄せいただいた。

●消えゆく学校名をハウスに残す

東京都立立川短期大学は、昨年春、同商科短期大学と統合し、東京都立短期大学となった。このため、この3月、同短大最後の卒業生を送り出すと、同校の名

わたしたちの合宿

ゼミを卒業できるかどうかは

みんなが決める

埼玉大学教育学部教授 山口和孝

山口ゼミの卒ゼミ式は、今年度も大学セミナー・ハウスで盛大に行なわれました。卒ゼミ式とは、その年度にゼミを卒業していくゼミ生を送り出す儀式です。

山口ゼミでは今年度、性・言語・障害・宗教・エスニシティや学力などによって教育の主流から遠ざけられている社会的弱者の存在を射程におきながら、教育における平等と公正をめぐるさまざまな理論的問題を考えてきました。今回の合宿の課題は、一年間の理論学習を基礎に、黒崎勲氏の『現代日本の教育と能力主義』(岩波書店)の構造を理解し、ロールズの「正義論」を批判的に検討することでした。

もう一つが、卒ゼミ式です。合宿二日目の午後から、卒ゼミ式の準備が始まります。卒ゼミ式のハイライトは、卒ゼミするひとりひとりの活躍ぶりや思い出をみんなで綴った「卒ゼミ証書」と、一杯に寄せ書きされた「卒ゼミ・アルバム」の授与式です。山口ゼミでは、大学の卒業と



山口研究室としては18年目のゼミ合宿。2泊3日の初日、セミナー室の入口で。最後列左端が山口和孝教授 (97.2.26/第4ゼミナー室)

称は消える。それなら、30年にわたって新入生歓迎セミナーなどを実施し続けてきた「われらがゼミナー・ハウス」に何らかの形でその名を残すことはできないだろうか——昨秋、同校からそのようなお申し出をいただいた。その結果、二つの備品がハウスに贈られることになった。一つは液晶ビジョンで、これは早速

は関係なくゼミを卒業できるかどうかはみんなが決めるといふ伝統があります。それは、すでに大学を卒業している人や他大学の人、あるいは、非常勤講師の先生や留学生など、さまざまな人達でゼミが構成されているからです。

今年度卒ゼミする最後の八人目は、非常勤講師として六年間学部教育に貢献をされたばかりでなく、山口ゼミの一員として、教育の素晴らしさと厳しさを情熱的にゼミ生達に語り続けてきた66歳の根岸泉先生です。ゼミを卒業してゆくひとりひとりの出会いや影響、あるいは失敗談などにひとしきり花が咲いた後は、今年はずいぶん腕をあげたゼミ

昨秋の共同セミナーなどで活用された。講堂の大型スクリーンに映し出される鮮明なビデオ画像が好評で、今後利用者の便に供される。もう一つはガボー作のリトグラフ(石版画)で、1月24日、岸國平学長らが贈呈に来館された。これは本館3階のラウンジに、同校の名を添えて掲額される(ともに13頁写真参照)。

専属ロック・バンドのお披露目。セミナー・ハウスからおしかりを受けたいよう気を使いながらも、盛大にもりあがった合宿でした。

最後の日、卒ゼミするひとりの学生が、第4群のゼミナー室を背にしなから、「八王子の山もこれが最後だなあ」とつぶやきました。

卒業論文中間発表に向けた「恐怖の」卒研夏合宿やこの春合宿など、ゼミ生達にとって何度かよった大学セミナー・ハウスは、へ学びの苦しさと喜び、そして議論し合い、飲みあう中で仲間信頼を築きあげてきたその足跡が刻み込まれた場所だからでしょう。

私が学生としてこの大学セミナー・ハウスに連れてこられ、いまにもひっくり返りそうに本館に込められた意味を、「大地に楔を打ち込む」ものと教えられて感動して以来、さまざまな形でもう覚えきれないほどの回数をゼミナー・ハウスにお世話になってきました。今の学生達にとって、トイレもお風呂もへ不便〜というここの合宿は、決して「魅力的」なものではないでしょう。毎年、「そろそろ先生も温泉付きの方がいいんじゃないですか」という声もですが、ゼミ生達が毎年申し送っていく伝統を刻みつけたこのセミナー・ハウスでの合宿ということになります。来年度は、今年卒ゼミ生達を送った学生が今度は送られる側として、再びこの山を訪れることでしょう。

わたしたちの異文化体験

—マレーシア留学生たちの声から—

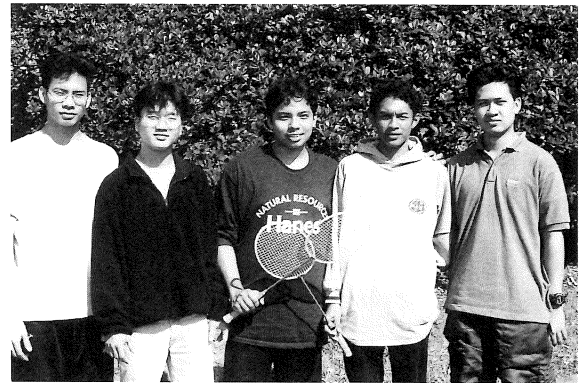
マレーシア政府派遣留学生が今年も1月6日より順に到着し、約3カ月間ハウスに滞在した。今回の第3期生は過去最多の94名(内女子19名)。滞在中に日本各地の国公私立大学を受験し、第1・2期生同様、「全員合格」を果たした(下掲「進学先一覧」参照)。到着して約2ヵ月後、入試も一段落したところで、全員にこの間の異文化体験を振り返り、ハウスが用意したいくつかの質問に答えてもらった。以下は、その回答からの抜粋である。

日本人の第一印象は……

●とてもまじめだと思います。朝、駅で走っている人を見るたびに、日本人は絶えず仕事に追われるのだなと感じます。
●道路を横断するとき、よく交通規則を



ハウス主催の月例「茶道教室」は毎回お点前を楽しむマレーシアの留学生で賑わった(97.2.17/遠來荘)



入試も一段落。放課後バドミントンなどを楽しむ留学生たちの表情も明るい(97.3.1/本館前広場)

守ります。車が走っていないなくても信号が青にならない限り渡りません。
●買いつくをする時に、「いらつしやいませ」から「ありがとうございました」まで、お客様を大切に扱うことにびっくりしました。

●日本ではどこでもコンピュータを使う。例えばバスの料金がカードで払える。電車もコンピュータで運営する。マレーシアにはありません。

●今まで皆がとても優しくて親切です。私はまだまだ上手に日本語を話さなくても耳を貸してくれるのはと

でもありがたいです。

大学生生活への期待は……

●私は日本人の考え方を学びたいと思います。だからできるだけだけぜひ日本人の行動や文化的な祭りに参加したい。

●キレイなところを旅行したり日本人の考え方や文化と習慣と食べ物と味わいたいと思います。

セミナー・ハウスの印象は……

●大学セミナー・ハウスのまわりの景色の美しさに胸を打たれました。今までここにいて、本当に楽しかった。

●留学を前にしている外国人にとって、このセミナー・ハウスは日本の生活を事前に準備するのによい場所です。もしここで日本の生活を学んでおけば、実際に生活をはじめたときに問題があまりなくなると思う。

マレーシアの将来は……

●私は4年間がんばって日本の技術を勉強して、国に帰ったらマレーシア人と一

緒にマレーシアを先進国にします。
●ぜひこのビジョンを成功させたい。マレーシアの経済力を強化させるとともに古くからの伝統を守りたいです。



成人式、節分、そしてひな祭りなど四季の行事を通して日本の文化に触れた。おひなさまを囲む女子学生たち(97.3.3/本館ラウンジ)

マレーシア留学生の進学先

大学名	国立大学	私立大学
北海道	2	
山形	1	
宇都宮	1	
埼玉	1	(1)
千葉	1	(1)
東京工業	4	(2)
東京農工	2	(1)
電気通信	3	(3)
富山	1	
福井	1	
山梨	1	
岐阜	2	
名古屋	1	(1)
名古屋工業	1	
三重	2	
京都	1	
大阪	1	(1)
神戸	1	(1)
山口	1	
愛媛	1	
九州	2	(2)
九州工業	2	
長崎	2	
熊本	2	(1)
鹿児島	1	
計	38	(14)
	国立大学	私立大学
早稲田		1
慶応義塾		3
明治		3
武蔵工業		6
芝浦工業		12
東京理科		1
東海		7
東京電機		4
東京工科		2
拓殖		6
立命館		6
近畿		5
岡山理科		2
計		56
合計		94 (14)

注：() は文部省推薦による入学者で内数

利用状況

'96年12月、'97年2月
* 同月2回利用
日帰りを除く

■12月(61グループ、延二二三二人)

- 東京都立大学生物学セミナー
- 中央大学田村・野澤合同ゼミ
- 駒沢大学教授 阿部 弘
- 一橋大学教授 石 弘光
- 国際基督教大学自分らしさへの試み
- 東京外国語大学助教授 八尾師 誠
- 中央大学教授 今 まど子
- 工学院大学助教授 遠藤 和義
- 東京都立大学リーダーズキャンパス
- 日本女子大学講師 小塩 和人
- 明治大学教授 久保田義喜
- 法政大学教授 五味 健吉
- 東洋英和女学院大学木村昌人・中央大学横山彰・慶応義塾大学山田太門合同ゼミ
- 明治大学講師 矢野 篤
- 東京外国語大学助教授 今井 昭夫
- 帝京大学明日の会
- 東京大学教授 庄司 興吉
- 中央大学助教授 園田 茂人
- 桜美林大学教授 河野 稔
- 工学院大学教授 吉田 倬郎
- 恵泉女学院短期大学英文学科総合科
- 目「国際」
- 早稲田大学教授 平澤 茂一
- 東京都立大学助教授 日向野幹也
- 早稲田大学絵画会
- 青山学院大学助教授 稲積 宏誠
- 早稲田大学教授 松嶋 敏泰
- 早稲田大学教授 片山 敬
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 高千穂商科大学助教授 岩田 伸人
- 立教大学助教授 有馬 賢治

- 高千穂商科大学講師 河合 久
- 日本女子大学教授 岩木 秀夫
- 立教大学教授 庄司 洋子
- 東京外国語大学リーダーシップトレニング
- 東京薬科大学生活協同組合
- 早稲田大学雄弁会
- 国士館大学教授 吉田 襄
- 東洋英和女学院大学短期大学部講師 東洋英和女学院大学短期大学部講師 佐伯 哲朗
- 埼玉医科大学短期大学助教授 岸 良範
- 東洋大学助教授 秋山 哲一
- 大月短期大学教授 村越 洋子
- 東京都立墨田川高等学校 立正大学講師 厚東 偉介
- 神田外語大学助教授 高杉 忠明
- 東京都立短期大学助教授 深津 健二
- 第17回社会学合同セミナー
- 現象学解釈学研究会
- 第17回大学共同セミナー
- CREH
- アカー
- フエニニストセラピー「ななかま」
- 東京都レクリエーション協会
- アンサンブル ユーリズミクス
- 日本グループワーク・トレーニング協会
- 国際教育交流協会
- A I T C
- 文学教育研究者集団
- イメーजीミングアカデミー/日本分光
- 〈個人利用〉
- V研究会
- 1月(22グループ、延二二五六人)
- 東京都立大学講師 鶴田 忠彦
- 慶応義塾大学教授 富永 健一
- 上智大学教授 渡邊 文夫

- 武蔵大学講師 洪谷 研
- 慶応義塾大学教授 山田 辰雄
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 東京都立大学教授 鳴澤 實
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 東京都立大学助教授 大塚 和夫
- 中央大学教授 田野崎昭夫
- 東京外国語大学教授 田島 信元
- 帝京大学講師 井上 久士
- 日本大学教授 鈴木 功
- 東京神学大学第28回就職セミナー
- 第13回大学教員研修プログラム
- マレーシア政府派遣留学生(日本イノドネシア科学技術フォーラム)
- 「かわりの発達と歪み」研究会
- 賢治のしはんがっこう
- A B C 測量研究会/コニカ/テラオカ/アイワールド
- 2月(69グループ、延五三三六二人)
- 法政大学助教授 増田 正人
- 成蹊大学アメリカン大学短期留学事前オリエンテーション合宿
- 中央大学教授 中川洋一郎
- 中央大学生生活協同組合
- 中央大学生相談室
- 駒沢大学教授* 小林 英夫
- 杏林大学講師 大槌奈々子
- 中央大学教授 高柳 先男
- 駒沢大学助教授 谷敷 正光
- 中央大学地理歴史研究会
- 中央大学経済学部行事実行委員会
- 中央大学教授 石川 敏行
- 中央大学学友会文化連盟音楽研究会
- 千葉商科大学教授 麻生 幸
- 中央大学音楽研究会混声合唱部
- 慶応義塾大学ワグネル・ソサイエテ
- イー男声合唱団
- 帝京大学明日の会
- 青山学院大学教授 寺東 寛治
- 東京都立大学教授 小林 良二

- 明治大学生体保険委員会
- 中央大学社会科学研究所
- 帝京大学書道部
- 中央大学総合政策学部D H A
- 千葉大学教授 嶋津 格
- 東京純心女子短期大学卒業研修会
- 早稲田大学教授 新澤 雄一
- 中央大学教授 金原 左門
- 千葉商科大学教授 菅沼 憲治
- 一橋大学教授 釜江 廣志
- 東京学芸大学助教授 岩立 京子
- 東京工業大学助教授 上田 紀行
- 東京学芸大学講師 投野由紀夫
- 立教大学キリスト教団体
- 東京都立大学助教授 人見 剛
- お茶の水女子大学助教授
- 明治大学講師 栗原 尚子
- 一橋大学教授 高松 基之
- 明治大学教授 鶴田 忠彦
- 駒沢大学教授 風間 信隆
- 東京電機大学助教授 寺中 良二
- 青山学院大学E・S・S 遠藤 晶子
- 埼玉大学教授 山口 和孝
- 成蹊大学文化会本部リーダーズ・キャンパス
- 創価大学教授* 赤木 愛和
- 八千代国際大学助教授 山口 桂子
- 立正大学教授 大津 悦夫
- 明治大学短期大学講師 江島 晶子
- 東京国際大学教授 関岡 正弘
- 聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教八王子合宿
- 聖学院ハンドベルクワイヤ
- マレーシア政府派遣留学生(日本イノドネシア科学技術フォーラム)
- 郡内研究会
- 首都圏ファンタジーグループ研究会
- 万国ローア・パプテスト福音伝道協会

- 東京若枝教会
- 基督教児童福祉会
- 南大沢フォークロールクラブ
- ワークショップセンター
- 八王子エンカウンターグループ
- 日本山岳協会
- 日野市ボランティアセンター
- J A 東京共済連/日本ピー・オー・ピー広告協会/明治アグリクス/国際交流サービスマス協会/富士電機
- 〈個人利用〉
- V研究会 吉本 昌司

●館長室から●

なま暖かい南風が吹き荒れた五月風の翌日は、痛みの点検にユニット・ハウスの廻るうち、職員共々、手足は冷えこむ寒さです。

都立商科短大との合併を機に、「都立立川短大」の名をこのセミナー・ハウスに残したいと、美しいリトグラフと液晶ビジョンをご寄贈下さった岸國平学長。以前ご来館の折、「三浦半島横断の道に美しいエゴの木」のトンネルが……の私の話を覚えて下さり、「丹精のエゴの苗木も持ち下さいました。シルバーハウス寄りの杉の伐採あとの整地完了の暁には、エゴの木の自然公園が誕生する筈。「一人の名前をどこにつけた、白い鈴のような花が匂うように風にゆれる……考えるだけで楽しいですね」に頷きながら、その日はいつかと夢みています。(岡)

表紙の写真は教授と学生、日本人と留学生の討論風景(セミナー室にて) / 第23回国際学生セミナーより